

光文社文庫

長編推理小説

京都不倫旅行殺人事件

山村^み美^さ紗



光 文 社



光文社文庫

長編推理小説

京都不倫旅行殺人事件

著 者 やま山 むら村 み美 さ紗

1988年11月20日 初版1刷発行

発行者	大	坪	昌	夫
印 刷	凸	版	印	刷
製 本	光	洋	製	本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03 (942) 2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Misa Yamamura 1988

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70837-4 Printed in Japan

三文社文庫

長編推理小説

京都不倫旅行殺人事件

山村^み美^さ紗



光 文 社

京都不倫旅行殺人事件 目次

第一章	舞妓姿の死人 まいこ	5
第二章	大原女 おはらめ の毒死	33
第三章	疑惑の写真	61
第四章	官能の夜	86
第五章	二重密室の殺人	109
第六章	不信の芽生え めばえ	134
第七章	謎のワープロ	164
第八章	再び殺人	185
第九章	疑惑	208
第十章	シングル密室の謎	235
第十一章	ダブル密室の解明	259
第十二章	終局	284
解説	郷原 宏 ごうはら ひろし	293

第一章 舞妓姿の死人

1

ペンション鴨川^{かもがわ}は、京都の先斗町^{ほんど}にある若い女性に人気のある宿泊所である。

東京から着いた三原麻知子^{みはら まちこ}たち三人は、建物を見つけると、ほっとして、玄関に入って行った。

三十二、三歳の着物を着た美しい女性が、応対に出てきた。

「おいでやす。お疲れでしたやろ。どうぞ奥へ」

やわらかい京都弁が、麻知子たちの心を和やかに包む。

長い廊下を通って着いた部屋は、二間続きの和室で、縁側には、洗面所と手洗いがついている。

三人は、大学時代の同級生で、今はそれぞれ東京の会社に勤めるOLなのだが、今日は休暇

をとって京都に遊びに来たのである。

「いい部屋ね。よかったわ」

上田^{うえだ}みどりが、あたりを見まわしながらいった。

「ここは、もと、お茶屋さんだったんでしょ？ お茶屋さんだったら、とても私たちの身分では来れなかったわね」

野川^{のがわ}ユミも、うれしそうだった。

「きつときっきの人が、女主人よ。舞妓^{まいこ}から芸者になって、結婚してこのお茶屋さんを買ったって、ガイドブックに出ていたわ」

みどりがそういったとき、当の女主人が、お茶を持ってやって来た。

早速、麻知子が話しかけた。

「あの……舞妓姿にしてくださいって、本当ですか？」

ガイドブックには、泊まり客には、二千円出すと、舞妓姿にしてくれると書いてあり、それが評判を呼んでいた。

「へえ。どうぞよろしかったら。これからにしますか？ それとも、明日の朝でもよろしおすけど」

「今からにしてほしいわ。舞妓姿になって、写真を撮るのが、夢だったの」
ユミが、すぐにいった。

「ほんなら、お茶を飲んでひとやすみしはったら、お風呂に入って、順番に来とくれやす。用意しときますよって」

「わっ、うれしい！ 早く、お風呂に入りたいわ。お風呂はどこですか？」
ユミがきいた。

「お風呂は、一階の一番はしにあります。えーと、ここです」
女主人は、部屋の見取図を書いた紙に、印しるしをつけた。

三人は、お茶を飲むのもそこそこに、風呂場へ行き、湯舟につかった。

「祇園ぎおんのほうにも、舞妓姿にしてくれるペンションが、ひとつあるときいたけど、そこも、ここ数カ月は満員だそうよ。私たち早くから申し込んでおいてよかったわー」
ユミが、軀中からだに石鹼を塗りつけながらいった。スポーツをするので、均整がとれ、女でもほれぼれするようなスタイルである。

「明日は、大原女おはらめに扮するのね。舞妓も大原女も、なってみたいものだったから、楽しみだわ」

みどりが、いきいきとしていった。

京都には、ただ泊まるだけでなく、着物を貸して着付けてくれるところや、大原女の恰好かっこうをさせてくれるところや、舞妓姿にしてくれるホテルがあるときいて、三人はやって来たのである。

「舞妓姿になったら、祇園のほうへ行ってみない？　八坂神社のところで、写真を撮りたいわ」

麻知子がいうと、ユミは、

「私、三条の大橋に立っているとところ撮りたいな。お見合い写真にするの」といった。みどりも負けずに、

「私は、南座の前で撮りたいわ。京都らしくていいと思うの」と賑やかだった。

三人が洗い終わって、湯舟につかったとき、戸があいて、若い女性が一人入って来た。

「よろしいでしょうか？」

「ええ、どうぞ。私たち、もう上がりますから」

麻知子が、愛想よくいった。

その女性は、色が白く、目の大きな可愛い顔をしていた。

風呂から上がると、三人は、とびはねるようにして、部屋へ戻った。

「肌襦袢はだじゆばんと、足袋たびがいるんだったわね」

「ええ。持ってきたわ」

「早く行きましょう」

三人は、はしやぎながら、浴衣姿ゆかたになって女主人に指定された部屋へ急いだ。

ユミがいちばん先に、座った。

まず、髪を束ねて頭にネットをかぶる。

女主人が、手のひらで、石鹼のようなものをこねて、顔に塗りつける。

「それは何ですか？」

じっと見ていたみどりがきいた。

「固形油です。下地クリームのようなもので、白粉おしろいのノリをようするんどっせ」

女主人は、笑いながらいった。

次が水白粉で、真っ白な白粉を水にといたものを、刷毛で顔や襟に塗る。襟は、三本足になるように塗り、顔は、鼻柱からである。

「真っ白になったわ」

みどりが、感心したようにいう。

「さあ、目をつぶって」

筆につけた紅で、目のふちを描き目尻を長くする。唇にも、小さく紅を塗る。

「とってもきれい！」

麻知子がいった。

次は、日本髪のかつらをつけて、髪にかんざしをさす。

「写真撮ってあげるわ。こっち向いて！」

みどりがいい、浴衣姿のまま、ユミは、シナを作った。

「さあ、着付けをしまひよ」

女主人は、そういつて、男衆おとこしゅを呼んだ。

男衆というのは、色街で、着付けをしたり、いろいろ雑用をする男の人である。ここの男衆は、女主人の弟だということで、三十歳くらいの精悍せいかんな感じの男だった。

てきぱきと長襦袢を着せ、紐を締め、振り袖を、襟を大きくあけて着せる。

「わア、ずいぶん締まるウ。大丈夫かしら？」

ユミが、悲鳴をあげた。

「大丈夫です。すぐ慣れますよって」

横で、みどりの顔を作っていた女主人がいう。

帯がきゅっきゅつと音をたてて締まり、だらりの帯になる。

「さあ、舞妓さんができましたえ」

女主人が、帯をぽんと叩く。

「素敵だわ。写真を撮るから、立ってみて」

麻知子は、ポーズを注文して、何枚も写真を撮った。

すぐに、みどりの着付けがはじまり、麻知子の顔が塗られて行く。

そのとき、ふすまをあけて、顔をのぞかせたのは、さっき風呂場で会った女性だった。

「あの……」

「ああ、今、呼びに行こうと思ってましたんです」

女主人がいうと、その女性は、廊下までついて来たらしい男性に、

「あなた、じゃ、行ってきます」

といって、中に入ってきて来た。

「あら、あなた結婚してるのオ？」

驚いたように、ユミがいった。

「ええ」

その女性は、恥ずかしそうにうなずいた。

「わア、いいわねえ。羨ましいっ！」
うらや

本当に羨ましそうにいったので、麻知子は、笑ってしまった。

その女性の名前は、杉野ジュン子といい、新婚半年目だということがわかった。

麻知子たちの舞妓姿が仕上がり、廊下へ出ると、その夫らしい男性が、廊下をうろろしながら待っていた。

「仲のいい夫婦なのね」

みどりが小声でいうと、ユミも、

「恰好いい男ね、羨ましいわ」

とまたいった。

三人は、表に出て先斗町を歩いて行った。途中で、すれ違う人たちが、

「あ、舞妓さん」

といったり、

「すみません、写真とらせてください」

というので、麻知子たちは、すっかりうれしくなってしまった。

「みんな本当の舞妓だと思っているのね」

ユミが、シナを作った途端に、履^はいていた、コッポリが脱げて、ひっくり返ってしまった。

「きゃっ、恥ずかしい！ マッチ助けて」

ユミは、二人の肩につかまって、やっと立ち上がった。

むこうから来た本物の舞妓が、口^{くち}に手をあてて笑っている。

三人は、履きなれぬコッポリをあやつりながら、必死で歩き、やっと四条通へ出た。

「大変ね、まるで、竹馬に乗っているみたいだわ」

「だから、あの女主人が、普通のはきものにしますか、コッポリにしますかってきいたんだ

わ」

「いいじゃない。このほうが写真にとったとき、恰好がいいんだから」
三人は、まず、四条大橋のところで、欄干らんかんの横に立って撮影をした。
舞妓が、舞妓を写しているの、観光客がめずらしそうに見て行く。

「次は、南座の前よ」

みどりが、念を押した。

3

三人が、ペンション鴨川に戻って来たのは、夜の六時だった。
外で食事をしようと思ったのだが、慣れない着物で苦しいうえに、汚してもいけないと思っ
て帰って来たのだった。

着物を脱ぐと、さすがにほっとした。

三人は、髪と顔はそのまま、浴衣を着て食堂に行った。

「やっぱり、みんな外で食べているのね、私たちだけだわ」

ユミが、食堂を見まわしながらいった。

「あの新婚さんも、まだ帰ってないのかしら？ 帯が締まって苦しいでしょうに」

みどりが、やっかみ半分にいった。

食事を食べ終わると、三人は、それぞれ別行動をすることにした。

麻知子は、疲れたので、お風呂へ入って、顔の化粧を落としてから、ゆっくりするつもりだったし、みどりは、京都の親類の家へ遊びに行くといい、ユミは、京都の街をぶらぶらするということになった。

麻知子は、風呂から上がると、縁側へ出て、窓ガラスをあけ、鴨川を見おろした。

前日まで京都は雨だったということで、水嵩みずかさが増して、川は音をたてて流れている。

隣の料理屋には、鴨川に張り出した床ゆかが出ていて、客が陽気にさわいでいた。床の下で、流しが河内音頭かわちをうたっているのがきこえる。

対岸は暗くて見えないが、橋の上には、まだ大勢の人がゆききしているようだった。

麻知子は、妙にやるせない気分になった。

「京都に、彼と一緒に来たかった……」

と思う。

彼女の恋人は、大垣という、同じ会社の上司で、妻子持ちの男である。

今日は、妻が子供を連れて、一泊で、実家のほうへ出かけているというので、晴れて電話ができるのだ。

「奥さんが泊まりに行かれるのなら、京都へ一泊の旅行に行ってくださいませんか？ 前からき

まっついて友だちと一緒になんですけど、宵のうちだけです。別のホテルに泊まってくださいね。行きますから」

と、頼んだのだが、彼は、ダメだといった。

「家内から電話が入るし、翌日、会社を休むわけにはいかないからね。まあ、京都で、ゆっくり遊んで来なさい。お小遣いはあげるから」

大垣は、同じ日に京都に行つては、みんなのうわさの的になるからともいった。

麻知子は、ガラス戸を閉めて、廊下へ出ると、公衆電話の前に立った。

このために、十円玉と百円硬貨は、たくさん持って来ている。

電話がつながった。

「もしもし」

なつかしい彼の声である。

声をきいただけで、軀の奥がうずくような気がする。

「私です」

「ああ。どう？ 京都は」

「とても素敵です。今日は、舞妓姿になったの」

「へえ、それはよかったね。見たかったよ」

「だから、写真たくさん撮ったんです。帰ったら見せますわ」